

アート、芸術を支えてきた 専修人の精神と知性

伝統芸能や芸能活動、絵画や写真、陶芸といった創作分野でも多くの卒業生が活躍しており、それぞれの世界をリードしてきた。彼ら、彼女らの創作の原点には、専修大学時代に培った体験や人との交流があった。一〇人の現在の活動と原体験を追う。

「落研」で教わった技術、度胸、 人との交流が落語家人生のスタートに

青森の八戸から出てきた田舎者の私にとって、入学当初は見るもの聞くもの、すべてが新鮮でした。大学のオリエンテーションに行こうと生田の坂道を歩いていいたとき、「落研」（落語研究会）の一学年先輩の女性に偶然声をかけられ、美しさにほろっとしたのがきっかけで落研に入会。落研は当時、総勢五〇人くらい。熟練度に応じて「前座」「二ツ目、真打ち」と昇進していくんです。私の真打ち昇進は三年生の冬で、同期では三番目。うれしかったなあ。

田急線の内車で度胸試し。車内の通路に新聞紙を敷いて、それが座布団代わり。そこに正座をして一席演ったり、小唄を歌ったりさせられるんです（笑）。

弟子入りを志願して 先代の文治を訪ねる

弟子入りを志願。一回目は師匠が不在、二回目は師匠に会えたのですが「落研出なんか生意気だ！」で門前払い、三回目に訪ねたら「何しに来た、帰れ！」。少し諦めかけたんですが、もう一度訪ねたところ、「また来たのか、しょうがねえ奴だ、取らねえー」からな。上がれ。初めて二階へ上げてもらい、「鶴」という唄を演らされましたが、徹底的に直されましたね。

い弟子から内弟子として住み込み修業の毎日。二ツ目昇進を経て一九九三年の真打ち昇進は、言葉では言い表せない感激でした。今後は毎年続けている「小文治十八番創りの会」で、自分の創意工夫を加えた落語を確立するよう精進する所存です。最近の後輩の指導を含めた活動もしています。また、断家だけでなく、素人の方にも「落語教室」などで落語を教えています。数年前からは専大落研の顧問を務めています、学生の活躍がとても楽しみです。

落語家 桂 小文治

（1980年商学部卒業）
青森県出身。在学中の79年、十代目桂文治に入門。80年の卒業と同時に通い弟子から内弟子へ。84年、二ツ目昇進。93年、真打ちに昇進。大師匠に当たる名跡、二代目桂小文治を襲名。文化庁所管の平成20年度芸術祭・大衆芸能部門で優秀賞を受賞。受賞対象作は、お江戸日本橋亭「小文治十八番創りの会」で演じた「宮戸川（上）（下）」。

*1【ピラとピラ下】ピラは寄席の宣伝ポスター。ピラ下は、ポスターの下に付いてくる無料入場券。



人生初の芸能での “収入”は、学食で披露した 恩師のモノマネだった！

タレント、俳優 小堺一機

（1979年経営学部卒業）
千葉県出身。在学中より芸能活動開始。TV番組「ライオンのごきげんよう」などにレギュラー出演。自ら構成と演出をする「25年目の小堺クンのおすましでSHOWイン グローブ座」（東京グローブ座）を9月4～13日、計10公演開催。



品学の吉田富義先生からは、高校で学んだ簿記と一味違う、数字や経済の深みや広がりを感じました。また先生は、学生に本気で対峙してくれました。私語が多くなると学生を注意し「本気だぞオレは」と叱ってくれたのです。あるとき、生田の学食のおばさんに吉田先生のモノマネを披露しました。おもしろかったらそばに天ぶらを付けて」というのが僕のお願ひ。「本気だぞオレは」とやったところ、これが受けて、生卵まで付いて、かけそばが天玉そばに（笑）。僕の芸

能活動初の“収入”でした。先生のことを好きだったのに、一方でネタにして茶化してしまうような学生だったんです。卒業後も、芸能界では叱ってくるよき先輩に恵まれました。僕も吉田先生のように、芸能界の後輩を叱れる先輩でありたいと思っています。芸能や文化は、なくても困らないけど、あったほうが絶対いい。夢も同じです。学生時代に絶対に「片づけられない」ものを探し、取り組んでいてほしい。また専大には、学生たちを守ってやる大きな防波堤でいてほしいです。

歌に楽器、 絵画、陶芸 —人々の心を 揺さぶる

専大で吸収した 人間味を育むゆとりが 今に生きている

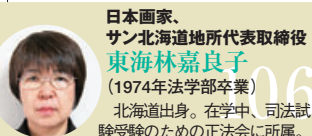
俳優 仲村トオル

（1989年文学部卒業）
東京都出身。専大在学中の85年、映画デビュー。以降、国内外の映画、テレビドラマ、舞台などに多数出演。「劔岳 点の記」が公開中。専大の創立130年を記念したCMにも出演中。11月中旬より舞台「フロスト×ニクソン」に出演。



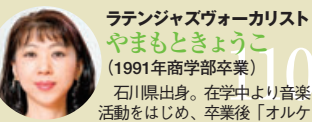
属高校から進学しましたが、大学に行く目的意識は「モラトリウム」だった気がします。ただ入学直後に父親が他界し、アルバイトに追われる日々になりました。当時は千葉から生田校舎まで約一時間かけて通学していたので、授業期間は通学沿線、夏休みは自宅の近くでバイトをしました。あるとき、新たなバイト先を探す立ち読み中に「映画出演者・募集」の記事が目につき、バイト先に履歴書を出す感覚で応募したのがデビューのきっかけです。最初に出演した映画「ビー・

バップ・ハイスクール」がヒットしてシリーズ化され、授業に出られないほどに忙しくなりましたが、まだ「忙しいバイト」という感覚で、卒業するまでは身分証にもすべて「学生」と記載していました。卒業後、初めて職業欄に「俳優」と書いたときの緊張は今でも覚えています。決してマジメな優等生ではなかったですが、母校専大はそんな自分を、点数第一主義ではなく「人間味を育むゆとり」の精神で見守ってくれました。創立一三〇年、まことにおめでとうございます。



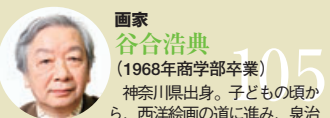
日本画家、
サン北海道地所代表取締役
東海林嘉良子
（1974年法学部卒業）
北海道出身。在学中、司法試験受験のための正法会に所属。卒業後、法律事務所、不動産会社勤務などをを経て、85年現社設立。05年、新興美術院主催「新興展」に初入選。新興美術院会員。

「正法会」で4年間、勉強漬けの日々でしたが、結果を出せず「自分の弱さ」を学びました。目標にたどり着けなかった後悔と、好きなことをやりたいという思いが時を経るほど強くなりました。「最後までやり遂げたい」という気持ちが今、日本画を描く原動力になっています。



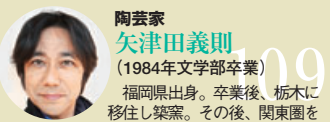
ラテンジャズヴォーカリスト
やまもときょうこ
（1991年商学部卒業）
石川県出身。在学中より音楽活動をはじめ、卒業後「オルケスタ・デル・ソル」のメンバーとなり、96年よりソロアーティストとして活動開始。2枚のソロアルバムをリリース。極真空手3段。

入学と同時に、憧れの極真空手同好会に入会。同好会では、故大山倍達総裁に直接指導を受ける機会があり、肉体的な鍛錬だけでなく、人生に大事な哲学を学びました。体づくりに心構えまで、その哲学は今年で20周年になる歌手活動においても、活かされています。



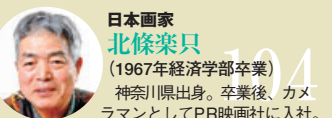
画家
谷合浩典
（1968年商学部卒業）
神奈川県出身。子どもの頃から、西洋絵画の道に進み、泉治彦氏、木下孝則氏に師事。専大在学中は、美術研究会に所属。一水会賞、アカデミーリュテス（パリ）金賞など受賞多数。

専大での4年間は、私の見聞を広げ、その後の芸術活動にも大いに役立ちました。友は皆、異なる個性や知識を持った先生のような存在です。多くの友を得ることは大きな財産。在学生たちも、一方向だけの考え方にとらわれず、異分野の人たちとの交流を広げていてほしいですね。



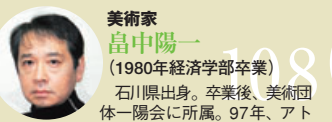
陶芸家
矢津田義則
（1984年文学部卒業）
福岡県出身。卒業後、栃木に移住し築窯。その後、関東圏を中心に全国で個展を開く。07年、里山での田舎暮らし経験を生かし、「セルフビルド 家をつくる自由」（旅行人）を出版。

専大の美術研究会では、夏期休暇に行なわれていた「益子陶芸合宿」に2年生から参加。そこでの窯元との出会いが陶芸の道に進むきっかけになりました。卒業後も、週末ごとに窯元へ通い技術を磨きました。今後は、陶芸の傍ら、執筆活動にも意欲的に携わっていきたいです。



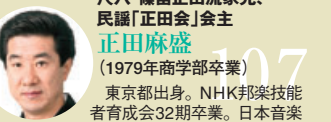
日本画家
北條楽只
（1967年経済学部卒業）
神奈川県出身。卒業後、カメラマンとしてPR映画社に入社。退職後、画家活動を開始。09年、横浜開港150周年を記念して「ハワイ日系人歴史絵巻」を公開。絵巻はアメリカへ寄贈予定。

専大で学んだのは「本質を見抜く力」「諦めない気持ち」でした。カメラマンとして社会問題と向き合うなかで、その力はさらに磨かれ、14年もの歳月をかけた、全長620mの日本画「ハワイ日系人歴史絵巻」制作にも生かされました。専大の教えが、今でも自分を動かしています。



美術家
畠中陽一
（1980年経済学部卒業）
石川県出身。卒業後、美術団体一陽会に所属。97年、アトリエYo-Kuを設立。和紙と漆による作品の制作を始める。99年の第7回テンプルウェア大賞のコーディネイト部門で優良賞受賞。

在学中、友人の紹介でエアブラシ画家と出会ったことが美術家になるきっかけとなりました。卒業後、和紙と漆を用いた現在のクラフトスタイルをつくり出すまでには、長い年月、失敗やムダを重ねました。試行錯誤のなか、さまざまな現代美術に触れたことが、財産になっています。



尺八・篠笛正田流家元、
民謡「正田会」会主
正田麻盛
（1979年商学部卒業）
東京都出身。NHK邦楽技能者育成会32期卒業。日本音楽著作権协会会员。海外・国内公演や各放送番組出演のかたわら後進を育成。文化庁委嘱事業「伝統文化こども教室」篠笛講師。

付属高校から専大に入学したので、受験を気にせず7年間、のびのびと過ごしました。そのため、習い事（尺八）を磨く時間が得られ、在学中にテレビや公演に出演するなど、今につながる経験ができました。生涯、芸の道一筋で生きるという決意が固まった、大切な時間でした。